つの説を主張していた事をあげ（類症鑑別　明治四年）、また明治三十三年（一九〇〇）にしめされているブライト氏病の名称を使用しない腎炎の分類を紹介する（内科類症鑑別）。

なお明治期において尿蛋白について、定性法をどのように実施していたかは未調査である。

（柏崎市）

68 Hirschberg 来日に会いし医師達

○奥沢　康正・ユルゲン・コバチ

明治二十五年九月十三日、日本に来日した Julius Hirschberg（一八四三～一九二五）は東京・名古屋・京都・滋賀・大阪・奈良・神戸・長崎と二十五日間、日本縦断の旅を続け詳細な紀行文を Um die Erde 第四編「Japan」（一八九四年刊）に、百三十ページにわたり記している。

Hirschberg が見物したのは観光地だけでなく各都市の医学部、病院等、以下の医療設備を訪問している。東京：東京大学医学部、井上眼科病院、赤十字病院、東京慈恵医院医学校。名古屋：衛成病院、熊谷病院、愛知医学校、愛知病院。京都：京都府立医学校、京都療病院。大阪：大阪医学校、大阪慈恵病院。神戸の私立病院（病院名不明）、長崎では官立第五高等中学校医学部（現在長崎大学医学部）。特

に東京大学医学部については詳細に記述している。

今年でもって、来日百年にあたり東京大学河本文庫の「ヒルシュベルグ蔵書」として、わが国にもたされるきっかけともなった、Hirschberg を接待した医師達（東京、百名・名古屋、八十名・大阪、六十名）の中から、当時の中外医事新報（三百一号・三百二号）、東京医事新誌、医事新聞等のHirschberg 来日記事、その他、河本重次郎著：『回顧録』、岩崎克己著：『河本重次郎傳』より、ホスト役の医師、特に以下の眼科医を中心としたプロフィールにつき報告する。

*河本重次郎　*榊　淑　*井上達也
*井上達七郎　*保利直美　*今居真吉
*佐々木東洋　*宮下俊吉　*中泉　正
以上眼科医。
*北里柴三郎　*長与専斎　*池田謙斎
*高木兼寛　*三宅　秀　*大沢謙二
*北川乙治郎　*橋本綱常　*樫村清徳
他数名。

（京都市）